慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵『四十二の物諍』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	三田國文 No.38 (2003. 12) ,p.47- 53
JaLC DOI	10.14991/002.0031200-0047
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20031200-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『四十二の物諍』翻刻

石川　透

凡例

本書は、慶應義塾図書館蔵の室町物語『四十二の物諍』である。本書の影印は、石川透『慶應義塾図書館蔵　図解御伽草子』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三年四月）に含まれている。解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

四十二の物諍（題簽）

むかし、ならのみかとの御ときにや、おりふし、とうくうの御かたへわたらせおはします。二月なかの六日のころなるに、なんてんのさくらは、夕はへにあかぬ色をそへ、みきはの柳は、もへきのいとをみたしたるかとうたかはれ、よろつになかめおはします。

春宮におほせけるは、「はると秋と、いつれおとらぬことなれとも、なを物のあはれをとゝめ、ことにふれて、かなしきは、秋のゆふへとこそ候へ。もろこしには、春をあはれみ、わかてうには、あきをあはれみ候とこそ見え侍れ。いかにさためおほさるゝにや」と、おほせ事あれは、中宮の御かたより、みとりのうすやうに、

おほかたはあらそふころといひなから
こゝろひとつに秋をさためん

とあそはして、こしゝうのきみして、まいらせ給ふを、御らんして、

［挿絵・第一図］
［挿絵・第二図］

「をんなは、秋をあはれみ候、ことはり、まことに」とて、わらはせおはします。うへも、いつより御つれ〳〵におほしめし、「これをはしめとして、四十二の物あらそひあるへし」とて、御まへにさふらはぬないしのすけなんと、めん〳〵に御つかひありけれは、まいり給ふ。

いろ〳〵のうすやうに、さま〳〵の事をあそはして、中宮の御かたをはしめとして、いま四十一なれは、くきやうてんしや

う人も、御まへにさふらひ給ふ。まつ、うへの御歌なり。

［挿絵・第三図］

月の夜と、雪のあしたと、

ふる雪はつもらぬかけもあり明の

月そくまなき冬の山さと

ひんかし山と、にし山と、

春宮の御かたより

月かけのいてつる山もわすられて

いりかたにすむわか心かな

［挿絵・第四図］

しくれと、松かせと、

中宮の御母

わきてなをあはれならしを松風の

しくれの音にかよはさりせは

衣うつをとゝ、夜ふねこくをとゝ、

ふしみの宮

ころもうつ屋とには夢もかよひけり

ねられぬ物は夜ふねこくをと

［挿絵・第五図］

やまひにくすりをえたると、こひしき人にあへると、

なか月の宮

うれしさはいつれもおなし色なれと

恋しき人にひくこゝろかな

風になみよる柳と、露にしほるゝすゝきと、

こうきてんの女御

あをやきのかけふむみちにやすらはむ

まねくすゝきはさもあらはあれ

［挿絵・第六図］

荻と、萩と、

せひりやうてんの女御

むらはきの露もあたなるなかめより

身にしむ物はをきのうはかせ

てと、うたと、

きりつほのみやす所

はま千とりそれとも見えぬあとそうき

わかのうらにはまとひはつとも

［挿絵・第七図］

かひおほひと、てまりと、

くわうくうの大夫

くろかみのみたれてさはくまりよりも

かひにおほへるそてはなつかし

うくひすと、ほとゝきすと、

とうくうの御おち、みきのおとゝ

むめかえにさえつる春のあしたより

なをめつらしきほとゝきすかな

［挿絵・第八図］

うとまるゝ身と、あかぬわかれと、

大しやう

かはる身はうきになくさむかたもあり

あかぬわかれのみちそかなしき

あかつきの恋と、夕のおもひと、
　　くわんはくの平大なこん
あかつきのたもとの露も数ならす
ゆふへの袖のぬるゝけしきは
［挿絵・第九図］
枝に色こきもみちと、庭にさひしきおちは、
　　五条の大なこん
もみち葉をさそふあらしもつらからす
庭のにしきにしく物そなき
みめと、しほと、
　　九条のさいしやう
しほやかぬうらそさひしきからさきの
松のすかたもなにゝかはせん
［挿絵・第十図］
みめのわるきと、ありかのあると、
　　さいしやうの中しやう
かつらきの神はよるともちきりけり
しらすありかをつゝむならひは
花と、もみちと、
　　こん衛の大しやう
紅葉はのちりゆく秋の夕より
はなに物うき風そうらみん
［挿絵・第十一図］
たのめてとはぬ夕暮と、かへるあしたのなこりと、
　　さんいの中しやう

あか月のわかれの袖の露よりも
とはぬうらみそやるかたもなき
おもへとかなはぬと、うらみある中と、
　　たうの中しやう
なからへはせめてあふ夜もありぬへし
おもはぬ人をまつそくるしき
［挿絵・第十二図］
菊と、梅と、
　　六ちようのいんのちうなこん
しらきくはうつろふ色をみるもうし
のきはの梅のかをやしのはん
みねにさけふさるのこゑと、しかのなくねと、
　　しゐのせうしやう
うき事をましらのこゑにきゝそへて
つまとふしかのねこそつらけれ
［挿絵・第十三図］
とをさとのけふりと、みねにわかるゝよこ雲、
　　さへもんのかみ
とをさとやひとすちたてる夕けふり
みね行雲にまかふ物かは
夢と、ふみと、
　　五ちようのさいしやう
はかなしやまれにまちみるたまつさに
見し夜のゆめをなにとたとへん
［挿絵・第十四図］

いはねのまつと、のきのしのふと、
中納言母
さひしさは岩ねの松やまさるらん
のきのしのふもあまりめなれて
しやうやうしんかうらみと、わうせうくんかかなしみと、
ときはの大しやう
なけき行道の草葉の露よりも
まとうつあめや袖ぬらすらん
［挿絵・第十五図］
しうとめと、まゝはゝと、
ほりかわのちうしやう
むさし野のゆかりの草もつらけれと
なをうき物はおやならぬおや
はいたんのおきなと、つりするあまと、
ちうくうの御しうとさへもんのかみ
しほかまのけふりになるゝころもより
つりするあまや袖ぬらすらん
［挿絵・第十六図］
をみなへしと、なてしこと、
ないしのかんのきみ
女郎花しほるゝ野辺にましれとも
なをうとまるゝやまとなてしこ
くもゐのかりと、みきはのをしと、
そつのすけ
はかなしやみきはのをしのかりまくら
雲井のかりにをよふへきかは
［挿絵・第十七図］
あふてあはさる恋と、ひたすらあはさる恋と、
うへの御つほね
あひみてののちの心にくらふれは
むかしは物もおもはさりけり
ふちと、やまふきと、
ちうくうの大なこん
いけ水のそこさへにほふ藤なみは
たくへてもみしいての山ふき
［挿絵・第十八図］
桜と、かいたうと、
中務
桜花おとゆく程のしたかけに
なとかひたうのねふり顔なる
つゝし、百合草、
重之
花の色はつゝしよりなを名にしおふ
ひめゆりこそはめてたかりけれ
［挿絵・第十九図］
卯花と、つはきと、
あふさかの大なこん
たまつはき千代をふりたる色みれは
世をうのはなをなにゝかはせん
かやうに、あらそひおはしたるところに、いんのこさいしや

う、にようゐんへまいりたまひて、此よし、けいしけれは、とりあへす、ねうゐん、わたらせ給ふ。

みかと、「おもひもよらぬ、いまのきやうかうかな。なに事にや」と、おとろかせ給ひけれは、「つれ〳〵にはんへる折ふし、かゝる御あそひとうけたまはり候て、まいり侍る」とおほせけれは、「いまた、神のあらそひなきやらん」とて、

［挿絵・第二十図］

［挿絵・第二十一図］

伊勢と、賀茂と、

ゐんの御かた

久かたのあまてる月のひかりには

あらそふ物かかものみつかき

八はたと、くま野と、

ねうゐんの御かた

いはし水きよきなかれもわすれねと

身にしむ物そみくまのゝうら

［挿絵・第二十二図］

女一のみやの、御ものゝけにて、わつらひ給ふ比にて、せそんしのそうしやう、御かちにまいり給ひけるめしありて、せんほうと、らいさんと、

そうしやう

なむしゝんよりすちりたるこゑよりも

をしおりなりやていしていさん

そのゝち、みかとより、「みめよき、しなたかき上らうの、よもき、

［挿絵・第二十三図］

むくらにとちられて、なくさむ物とては、うたをよみ、くわんけんして、日をくらし、たへかたからんと、としより、おいたるおきなの、せにのたはらに、よりかゝり、『おきなか物こそ、わこせか物よ』と、わなゝき、ふるわんと、いつれなるへき。わかきねうはうたちのかたへ」とて、御すゝりくたされける。

ないしのすけとりて、ちうくうの御かたのねうはう、

くなひきやう

あちきなしとみのをかはのなかれより

こけむすやとに月をなかめん

［挿絵・第二十四図］

おなし心を、

こうきてんのみくしけ殿

なかれあるとみのをかはのすみなれて

こやむすやとをよそになかめん

けんしの、によさんの宮、かしはきのゐもんのかみの文を、しとねのしたより見つけられし、あさましさよと、うきふねの、ひやうふきやうの宮の御事を、かほる大しやうにしられたてまつりて、「すゑの松」とかきて、つかはされたりし心をは、いつれ、つらかりける、

［挿絵・第二十五図］

ひやうふのきみ

うきふねの身をこかしけるおもひより

しとねのしたにしく物そなき

おほろ月夜のなひしのかみに、こうきてんのほそとのにて、

あひそめしけんしの心と、おちはのみやを、ゆふきりの大しやうの、をのにて、見そめしわりなさとは、いつれ、

［挿絵・第二十六図］

大なこんのきみ

をきそめしおちはかうへの露よりも
おほろ月夜のかけそこひしき

てのよからんと、こと葉のいたらんと、

中つかさ

しきしまややまとことの葉のあれぬれは
みるかひもなき水のくきのあと

［挿絵・第二十七図］

あひと、すかたと、

しきふきやう

よそにのみ花のすかたを見てもなを
あひみぬ恋そしつ心なき

かしはきのゑもんのかみ、むなしくなりしおもひと、ありあけの大しやう、やまふかきかなしさと、いつれ、

［挿絵・第二十八図］

さいしやう

おもひいる月はこよひをたのむとも
きえしけふりのゆくかひそなき

これにて、四十二しゆになりぬれは、色〳〵にさため給ふ中に、ときはの大しやうの、しやうやうしんかうたにそ、まつ、てんかゝりける。つき〳〵、十一しゆに、てんかけおはします。

そのゝち、御さかつきまいりけるに、十六日の夜の月なれは、やう〳〵すみのほりけるに、いろ〳〵の御こそて、なをし、かりきぬすかたにて、とり〳〵に、ひきて物たまはりて、あそはしける。

ちうくうの御かたは、いま二十一にならせ給ふ。しろき御こそての、なたらかなるに、

［挿絵・第二十九図］

柳の五つはかりをそ、おかしけにきなし給ひ、さやうの事により、ゐさせおはします。たゝならぬ御事にて、このころ、御さとへおはしますへきを、みかとは、あかす、かなしくおほしめしけり。

［挿絵・第三十図］

御しうとのひやうへのきみ、うきおり物に、なをし、けさうはなやかにて、よこふゑふき給ふ御さま、くさなき月に、さしむかひて、うつくしともおろかなり。ちうくうの御かほに、よくかよひたまへるも、ことはりなりと、みかと、御らんす。

みかとは、御ひわ、ゐんの御かたは、わこん、りつのしらへにて、おもしろくきこゆるに、みきのおほいと、そのころ、さくらうたひて、さうかし給ふ。

くわさむのゐんの御こ、しゝうのきみ、いまた、わらはすかたにて、ひちりきふき給ふ。ねういんの御かたより、くれなゐの御きぬ、かけさせ給ひけり。

かりそめのあそひとおもへとも、ことさら、身にしむはかりなり。やう〳〵あけかたになり行は、みかと、くわんきよならせおはします。

［挿絵・第三十一図］

ときはの大しやうは、ないしのきみのおもかけ、かたときも、わすれすおほしめし、こかれ給ふ。そのゝち、あさからぬ事にそきこえしなり。